

『装飾舞踊と無装飾舞踊』

目 代 清 (日本大学)

必ずしも『日本舞踊』から始まったことではないようですが、『日本舞踊』の上演形式には「素踊り」と、通常一般的かつ伝統的舞舞台舞踊の上演形式である「衣裳付」の大別二種があります。双方の舞踊の上演形式とその名称とは、ともに日本舞踊界では日常的なものです。その概念は曖昧で、舞踊家の多くは乱用・混乱ともいえる便宜的な使用にまかされています。したがってまた、観客は、『日本舞踊』に精通している場合は別として、多くの方は、双方の区別・差別がどこにあるのか理解せず、「素踊り」は単に衣裳を節約した舞舞台といった程度にしか理解せぬまま、観賞を繰り返しているのです。

そこでまず、その概念を判然とさせた上で、今回のシンポジウムの本題である「舞台美術と舞踊表現について」を討論する手掛かりにしたいと思います。

日本では、舞踊を「ショー」として観客から入場料を徴収した上で、舞台で演じる歴史は古くからあります。その典型が「歌舞伎」です。「歌舞伎」が興行上の一つの目玉は「花」として位置づけ、長年月にわたって上演し続けてきたのが「所作事」＝舞踊です。一般大衆を対象としての娯楽の提供者たる「歌舞伎」での「花の舞踊」は、常に、立方（演者＝踊り手）の扮装・装置（大道具）・地方（じかた＝音楽演奏者）に至るまでの万端に、最高に贅沢かつ華美な装飾を施し、虚の宇宙を最大限に利用して「夢を観客に売る」ことに徹して上演してきました。その姿勢は伝統的娯楽の提供者としての現行歌舞伎の興行でも、『京鹿子娘道成寺』や『鶯娘』などに見る通り変わっていません。否、むしろ現在の方が、江戸時代より劇場機構全体が著しく発達・発展・拡大したことから、より多大な経費をかけ、装飾性を遺憾なく発揮して上演していると言えるでしょう。その意味でも、『日本舞踊』の範疇の一つである歌舞伎舞踊は最大・最高の装飾舞踊なのです。市井一般の日本舞踊家の場合も、舞踊会で歌舞伎舞踊を上演する時は歌舞伎本興行ほどでないにしても、ほぼ同様の形式・規模で上演します。一方「素踊り」は、先のショーの精神に満ちたものではなく、全く別な芸術性を狙った上演形式であるところから、基本的に歌舞伎興行で扱う舞踊ではなく、したがってまた歌舞伎役者も基本的に上演しません。

「素」の意味は文字通り「装飾を除いたもの」であり、代表的な作品は『北州』『老松』など数多く、ことごとく男性が立方であれば「紋付き袴」、女性なら「前割れ、後見結帯」による礼服

を着用し、「天地金」の舞扇を手に舞台へ出勤します。装置は現行のスタイルでは「屏風」のみを使用し、地方も後見も全てが「黒紋付き袴」を着用します。これら礼服用の意義は、今ここで詳細に述べる隙はないので省きますが、要は「無垢」の意であり「無装飾」ということなのです。しかし「素」は「無」であっても「生」でない点に留意しておくことが肝要です。また「素」の他に「半素」「混素」もあります。が、これらに関しては、この際、本題の討議・理解に混乱をきたすので、ここでは省きます。

さて、今回のシンポジウムは「舞台美術と舞踊表現について」がテーマです。そこで『舞台美術』の概念ですが、通常は舞台の「装置・扮装・照明」など全体が、その範疇に含まれますから、それぞれ三つの関連において舞踊の表現に関して論じ合う必要があるでしょう。しかし、今回この場では舞台美術の内の「装置＝大道具」に限定しておきます。

そこで『日本舞踊』の立場からの舞台美術＝装置（大道具）との舞踊表現は、先にいう二つの上演形式により異なりがあります。まず「装飾舞踊」の場合、内容が叙事と叙情とで若干の差があると思われませんが、共通するのは「役上の人物」が「戯曲が設定する環境」の範囲内で踊るという二点にあります。ということは扮装・大道具はもとより万端説明的装飾を施して上演されるのであります。それが古典作品に限らず「新作・創作」であっても同様です。対する「素踊り」の場合は、立方が歌舞伎役者のように「立役・女形」の別もなく、作品内容を衣裳や装置などの力を借りることなく、ただひたすら身につけた表現力のみで、設定する場・時など、環境や人物を瞬間的に表出するのを特徴としています。つまり、特定の役に応じた扮装・装飾を施しては、例えば『北州』のごとく一作中に登場する数十に及ぶ人物や、その人物が置かれた周辺環境の変化を表現するのに支障をきたすのです。したがって、作品自体が、当初から扮装・大道具など一切の説明的装飾を排除したところの、無装飾による舞踊表現とその上演形式を期待・予測して成り立っているのです。観客はまた、その立方の変転する表現を頼みに、背後の屏風や扇子に瞬間的に絵を描き、同じく無＝裸の立方に瞬間的に扮装を施して鑑賞します。つまり観客の鑑賞法においても、高度な教養に基づく想像力・創造力が要求される「素踊り」なのです。新作・創作の場合も同様です。要は日本舞踊家の至高の芸の目標が「素踊り」に他なりません。